

的な葉を持ちあわせていることになり、小さいものほど、陰葉的な葉あるいは陽葉的な葉しか持っていないことになる。さらに、それが照度のちがいによって変化する樹種と、あまり変化しない樹種に分類整理ができそうだ。

4. む す び

4段階の相対照度区における10の樹種を使った実験で、葉面積と照度の関係(図-1)では、ほとんどの樹種が逆相関を示すのに対し、アカメガシワ等は正の相関がみられて、特長的である。しかし葉面積比と照度の関係(図-2)では、すべての樹種が逆相関を示し、(1)式の常数a, bの値によって、照度による陰葉化の傾向、全光線下での葉面積比の上限値の樹種間差が求められる。また葉面積比の変動係数の照度によるうごきによって、陰葉的、陽葉的緑葉のもちあわせぐあいが求められそうだ。

この研究は下刈対象地における雑多な広葉樹類が、造林木の生長を阻害する程度の強い種類組成、微弱な種類組成等、現地診断と対策をたてるための基礎的資料を提供することを目的としている。

表一 葉面積比の変動係数

樹種	相対照度(%)	100	55	30	6
ムク		19.0	17.1	16.8	—
アカメガシワ		11.7	6.7	15.4	12.7
ナンキンハゼ		6.7	16.9	13.9	—
クヌギ		9.0	15.9	18.5	9.5
クサギ		8.1	13.7	14.5	14.8
クヌス		11.2	11.9	13.1	9.0
コジイ		—	22.5	20.4	27.7
アラカシ		14.2	21.1	14.4	19.7
ネズミモチ		17.6	18.6	15.8	14.2
ツバキ		27.6	19.7	6.6	25.4

林地除草剤に関する研究

—DPAのススキ抑草効果—

福岡県林務部 齊 城 巧
浦 塚 忠

除草剤の開発に伴ない、林地のススキ枯殺は技術的にかんまり確立されてきたが、このうち、DPA(ジクロールプロピオン酸ソーダ)15%粒剤の散布量の違いと、冬期散布によるススキの抑草状況を追跡調査したので、その概要を報告する。

1. 試 験 地

試験地は、福岡県甘木市上鉢久保県営林の海拔高340mの7年生スギ造林地で、花崗閃緑岩を基岩とする砂質壤土である。プロットは、谷筋凹地の推積性BE型土壌でやや湿性のスギ造林適地であるが、ススキの繁茂が甚しいため造林木は毎年被圧されて不良林分となっている。

2. 試 験 方 法

① 散布量試験

谷筋凹地のススキ群落から50株を任意に抽出し、株径10cm当り、5g, 7g, 10g, 20g, 30g, の基準量で各々10株スポット処理、処理は昭和44年4月に実施し昭和45年9月まで計5回追跡調査を行なった。

② 冬期散布試験

- i) 昭和45年2月、株径10cm当り10gの基準量で20株スポット処理、同年9月まで計3回追跡調査を行なった。
- ii) 昭和45年2月、10×10mプロットにha換算200kgを全面散布、同年9月まで計3回追跡調査、なお、①散布量試験、②冬期散布試験ともに、草丈が下刈を要する状態のもののみを萌芽とした。従って、再発生しても明確に抑草状態のものは萌芽としなかった。

3. 調査結果及び考察

① 散布量試験

スポット処理後、ススキの繁茂期間中に2ヶ月毎に調査した結果、各処理量に対する萌芽率の平均値は(第1表)、(第1図)のとおりとなった。

萌芽率50%内外の状態を刈払いとした場合、基準量5g, 7gは、ある程度萌芽を抑制することができるが、大体において回復が早く抑草効果も乏しい結果となった。基準量10gは、処理当年はかなり抑草効果が表われて刈払いの必要もない状態であったが、翌年からは回復し5g, 7g処理と同じ状態となっている。基準量20g, 30gの処理になると、株が完全枯殺の状態になり、当年、翌年ともにススキの再発生はほとんどみられなかった。このことから、スポット処理の薬剤量は株径10cm当り20g内外の量が必要であることが考えられる。

② 冬期散布試験

冬期散布試験については、小規模で試験期間も短かったため資料不足であるが、予備的な試験の結果(第2表)を得た。

調査の結果、株径10cm当り10gのスポット処理は明らかに抑草効果が表われたが、ha換算200kgの全面散布はかなり刈払いを要する結果となった。

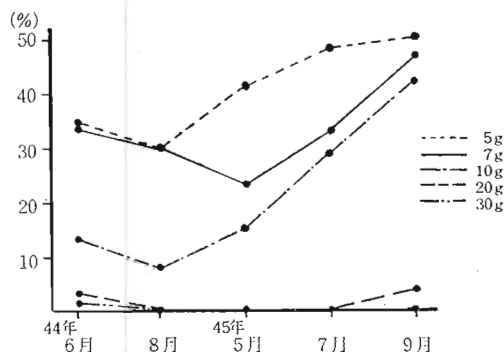
なお、冬期の抑草の技術の確立は、労働配分とともに、林地の施業上重要な役割を果すので、今後の研究が必要である。

(第1表) 処理量と萌芽率

年月	44年6月	〃 8月	45年5月	〃 7月	〃 9月
5g	35.0	30.0	41.0	48.0	50.0
7g	34.0	30.0	23.0	33.0	46.0
10g	14.0	8.0	15.0	29.0	42.0
20g	4.0	0.0	0.0	0.0	4.0
30g	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(萌芽率は10株平均値)

(第1図) 処理量と萌芽率



(第2表) 冬期散布と萌芽率

年月	45年5月	7月	9月	摘要
処理				
スポット	25.0	10.0	6.0	20株平均値
全面	25.0	30.0	35.0	〃

除 草 剤 の 薬 害 に つ い て

大分県林業試験場 金 田 文 男
諫 本 信 義
河 野 俊 光

地拵えとして林地へ薬剤を散布し、その直後に植付を行なった場合、及び植付直後に薬剤を散布した場合、植栽木(スギ)生育にどのような影響を及ぼすか

調査したので報告する。

Ⅰ 試験方法